【研究ノート】デフリンピック関連報道の内容分析と今後の課題

小倉和夫

デフリンピックが2025年に東京で開催されることもあり，これまでのデフリンピックに関する新聞報道の傾向を分析しておくことが望ましいと思われる。本稿は前回大会（2017年トルコのサムソンにおける大会）以降，2022年末までの邦字紙３紙（読売新聞，朝日新聞，毎日新聞）の記事（地方版も含む）におけるデフリンピック関連報道の傾向についてまとめたものである。

その際，分析の視点は，デフリンピックに関するいわば問題点がどの程度，また，どのように報じられているかに据え，デフスポーツをめぐる問題点や課題があきらかになるよう，かつ，デフリンピックの選手像が浮かび上がるようなアプローチをとった。具体的には，認知度あるいは知名度，それと連動する表彰の態様，障害の原因，障害にともなう生活上の困難，その克服にあたってのスポーツの役割と選手の意識変化，聴覚障害スポーツ特有の困難や特別のルールの態様，デフリンピックあるいはデフスポーツ一般をとりまく社会環境，すなわち財政問題や技術開発などの項目別に報道の内容を分析した。

１．認知度あるいは知名度の問題

デフリンピックについての報道で，なによりも顕著な点は，デフリンピックの知名度が低いという事実，または認識についての指摘である。

この点の指摘は，選手自身（中島, 2017），選手団長，監督など統括的立場にいる者（荒井，2022），ろうあ連盟関係者（『読売新聞』2017年６月13日朝刊）などデフスポーツ関係者の言葉として，あるいは学生，企業人など一般人の反応として報じられている（『読売新聞』2022年９月19日朝刊，荒井・畔川，2022）。また，正確に何に関する知名度かという点については，デフスポーツ一般，あるいは特定の競技（清水，2022），あるいは（特にパラリンピック比較して）デフリンピック「大会」の知名度を念頭においた発言などに分類できる。さらに，そもそも，デフリンピックの知名度の低さの問題は，ろ

う者についての知識，理解の一般的欠如の一環とみなす指摘もある（渋谷，2020）。

知名度の低さを特に問題とする具体的背景，あるいは要因として指摘されている点は，社会の関心の低さといった一般論のほか，競技人口の不足，選手の活動のための資金不足（城戸，2017）などが主なものである。

なお，知名度の低さとそれによる各種の困難の指摘は，一種の社会的「訴え」のかたちをとっており，知名度の低さの「原因」，特にパラリンピックと比較してその原因を深く考えさせるような論議は，新聞報道に関する限りほとんど存在しない。たとえば，そもそも，ろう者と報道関係者がどのようにしてコミュニケーションをとっているのか，そこに如何なる困難があるのか，取材者側に手話のできる人かどの程度いるのか，ろう者関係団体，とりわけスポーツ関連部署や行政当局の PR 活動に問題がないか，などの点についての報道は殆ど見いだせない。

他方，知名度の低さが，逆に知名度をあげるためにもメダルをとる，よい成績を残す，といったかたちで，選手のやる気を起こす結果となっているケースについての報道は随所に見いだされる。

2．表彰

デフリンピックの認知度が低いことは，多くのマスコミや地方自治体関係者によっても認識されており，知名度を上げる試みの一つとして，幾つかの自治体によって地方レベルでの選手表彰が行われている。たとえば，女子バレーで金メダルを獲得した日本チームの主将，宇賀耶早紀選手は，栃木県からスポーツ功労賞を，栃木市から市民栄誉賞を受けた。また，東京都は，デフリンピックトルコ大会でメダルを獲得した都内在住の選手12名に都栄誉賞を与えた（『読売新聞』2017年９月５日）。青森県は，陸上100メートルの金メダリスト佐々木琢磨選手に県民栄誉賞を授与し（『読売新聞』2022年５月27日），鳥取県は，優勝した種目の選手，女子バレーの前島奈美選手と陸上男子400メートルリレーの中村開知選手を特別顕彰し，10種競技と走り高跳びで入賞した前島博之選手に県スポーツ顕彰を行った（横山，2017年）。島根県は，水泳競技で合計９個のメダルを獲得した藤原慧選手を県功労者表彰した（内田，2017）。北海道では，バドミントン女子シングルスの銅メダリスト長原菜奈子選手が道栄誉賞を受賞し（佐藤，2017），鹿児島県出身の尾塚愛実選手（バレー）は，優勝に貢献したとして知事表彰をうけた（野崎，2018）。また女子棒高跳びの銅メダリスト末吉凪選手は，京都府の特別栄誉賞を得た（永井，2022）。愛知県では，男子ハンマー投げの金メダリスト石田考正選手と，卓球男子団体戦で銅メダルを得た川口功人選手に県スポーツ功労賞が与えられた（上山，

2022)。佐賀県では，ブラジル大会の水泳競技で７個のメダルを得た金持義和選手が県スポーツ賞栄誉賞を与えられた（平塚，2019)。

地方自治体ばかりではない。所によっては，その地域の記者会が表彰するケースもある。たとえば，島根県では，県内の報道機関15社が「島根スポーツ記者クラブ賞」大賞にデフリンピックのメダリストの水泳選手藤原慧を選んでいる（市野，2018)。また，ブラジル大会の競泳女子100メートルバタフライで金メダルをとった斎藤京香選手に，山梨スポーツ記者会賞が与えられている（佐藤，2022)。

全国レベルのものとしては，トルコ大会での入賞者71人と指導者12人が文部科学大臣の表彰を受けたことが挙げられよう（『朝日新聞』2017年12月６日朝刊)。また，民間で，全国レベルの表彰としては，読売新聞社制定の「第２回日本パラスポーツ賞」が，デフリンピックにおける女子バレーボール日本代表と水泳の藤原慧選手に優秀賞を授与している（中安，2017)。なおその際，各々に100万円が贈られ，同時に日本デフバレーボール協会と日本ろう者水泳協会に各200万円が贈られた（平野，2018)。

その他，選手が所属する会社などの職場で特別の祝賀会が開かれた例（金メダルをとった女子バレーチームの一員である尾塚愛実選手）についての報道もある（『読売新聞』2017年８月26日)。

しかしながら職場の祝賀会が報道されたり，各都道府県における表彰がことさら報道されたりしていることは，報道の意図あるいは表彰の効果の一面がデフリンピックの認知度の向上にあるにしても，そうした表彰がことさら報道されていること自体，逆にいえば，デフリンピックの認知度の低さを暗示しているものともいえよう。

また，これらの表彰はそれぞれ意義があるものの，多くは，スポーツあるいはパラスポーツ表彰の一環であり，聴覚障害スポーツに制度上特化したかたちで表彰が行われる仕組みになっているものは，鳥取県のみである。また，ごく一部の例外を除き，表彰は賞金を伴っていない。

いずれにしても，報道の態様，表彰の意味双方とも，地元の選手の活躍を地元の誇りとして称えるものが主であり，全国的に知名度を広げる役割を持つには至っていないといえよう。

３．障害の原因

デフリンピック関連報道では，選手個人がろうあるいは難聴になった原因もしばしば報じられている。

障害の原因については，殆どのケースが，身体障害者とは異なり，先天的（生まれつ

きか，１～２歳の頃からすでにろう，または難聴）とされている。たとえば，女子バレーボールの日本代表の一人尾塚愛実選手は，生後約７ヶ月の検査で，感音性難聴と診断されたという（『読売新聞』2017年７月14日）。また，女子デフサッカーの日本代表の一人宮田夏実は，「生まれつき耳が不自由」とあると報じられている（清水，2022）。

他方，幼児時代の病の後遺症の結果として，少年期になってから難聴になるケースも指摘されている。たとえば，2013年のブルガリア大会の50メートル背泳ぎで金メダルをとった金持義和選手は，小学１年生の冬のある日「朝起きると母の『おはよう』の声が聞こえなかった」「怖くて泣いていた」という。このケースでは，障害は幼いころの病気が原因とされている（読売新聞，2017）。また，少女期（小学４年生頃）から病気で，「徐々に両耳が聞こえづらくなった」というデフテニスの喜多美結選手のケースもある（『読売新聞』2020年１月９日）。

いずれにしても，パラリンピック選手における障害は，その根本原因が社会性を帯びるケースが少なくないが（たとえば，列車事故によって障害をうけたケース，あるいは自然災害や不慮の交通事故によるもの），聴覚障害者にはそうしたケースは日本ではほとんどなく，先天性か，あるいは個人的な病いが原因である場合が大多数を占めていることが特徴的である。

パラリンピック選手の場合，障害の原因が報道されているケースはむしろ例外的であるのに比し，デフリンピック選手については，大多数のケースにおいて，障害の原因が報道されていることは，身体障害と比べ，障害が容易に可視化されにくいことと関連しているのか，あるいは，デフリンピック選手の特徴を報じるにあたり，スポーツ面での成績だけでは，アピール度が低いせいなのか，今後分析が必要であろう。

いずれにしても，パラリンピック選手についての2017～2020年の期間の報道分析によれば，障害の原因は「先天性の障害（生後間もない時期の発病による中途障がいも含む）」「発病による中途障害」「事故や災害を原因とする中途障害」の３つに大別されることが示されている点を考慮すると（小倉, 2021），スポーツによる障害の克服における，個人の努力と社会の責任についての考え方について，デフリンピックとパラリンピックでは微妙な違いが生ずる可能性があるとも言えよう。

４．生活上の困難

聴覚障害の原因とならんで，障害が，当事者の日常生活一般にどのような不便，困難を与えてきたかについての報道も少なくないことが，デフリンピック関連報道の特徴である。

短距離ランナーで，自身が勤務する生命保険会社で唯一のろう者である岡部裕介選手は，「会社の飲み会にはできるだけ顔をだしている」が，「会社の飲み会はろう者を孤独にする。1対1なら口の形で何を言っているのか分かる。けれど飲み会では，口，口，口。あっちで笑い，こっちでカンパーイ。何が何だか分からないのだ。おおぜいのなかでひとりぼっちを感じる」と報じられている（中島，2017）。

聴覚障害のゴルファー輿石祐吾選手は，和菓子店に勤めているが，普段人と話すときは耳よりも相手の口元の動きを頼りにするので，皆がマスクをしているコロナ禍の下での仕事は苦労の連続だったという（『読売新聞』2022年4月26日）。また，聞き取りにくいので聞き返したくとも，雰囲気を悪くしてはと遠慮するため，自然と口数が少なくなり，孤独感を味わうといったケースもある（斉藤，2017年7月16日）。また，なんとか聞き取ろうとして精神を集中する結果，頭痛に見舞われた体験（田中，2017），普通校に通い体育の授業は嫌いだった，「周りが何を言っているのか分からず，盛り上がりについていけない。コミュニケーションが取れれば楽しめた。子供の頃にろう者のスポーツが体験できる機会がほしかった（斉藤，2018）」などの報道もなされている。

こうした個人の体験談を越えて，ろう者に対する社会の「バリアー」を報じた記事も，数は少ないが存在する。たとえば，ブルガリア大会の自転車競技で銅メダルを獲得した早瀬久美選手は，薬剤師を目指し1998年に試験に合格したが，聴覚障害が欠格条項となって免許が取れなかったという（その後署名運動の結果もあって2001年に法律が改正され免許が与えられた）（斉藤，2017年7月20日）。また，日本デフゴルフ協会によると，「かつては危険だとして聴覚障害者のプレーを制限するゴルフ場があったが最近は受け入れる所が広がってきた」という（高津，2019）。

このように，デフスポーツ選手の日常生活における困難の体験に関する報道は，代表になりうるような選手と一般の聴覚障害者との溝を埋める効果がある一方，デフスポーツの競技性に注目する内容ではないという意味で，スポーツ報道としてのデフスポーツ報道が，いまだ十分成熟していないことの現れとも考えられる。

5．意識変化

他方，スポーツ活動への参画によって，ろう者の日頃の意識が変化したことについての報道も散見される。

例えば，デフリンピックでの棒高跳びの銅メダリストの竹花康太郎選手は，中学時代には「なんで聞こえない俺を産んだんだ」と母親をなじることもあったが，高校時代から陸上競技をはじめ，前向きな姿勢になれたという（白井，2021）。また，なかには，

聴覚障害がスポーツ活動の上で，障害となるばかりではないという意識が出ていることがうかがえる報道もある（高村，2022）。難聴のゴルファー輿石祐吾選手による，聴覚障害は，「ショットを打った時の音の違いを聞き分け，理想のスイングができたか確かめる」ことができず，不利な点もあるが，「周囲の雑音が聞こえず，自分の世界に没頭できる強みもある」という発言を取り上げた記事はそのひとつである（高村，2022）。

なお，自己のスポーツ活動自体よりも，それを他人と分かち合うことによって，障害への意識の変化をとげた者もいる。たとえば，デフテニスの喜多美結選手は，「デフテニスキッズ」でテニスと出会い，指導活動への参加や国際大会への参加を通じ，次第に積極的となり，補聴器を隠すため耳元に髪をかぶせていたスタイルを変え，髪を後ろに束ねる髪形に変えるなど，心の変化ももたらされたという（渋谷，2020）。

また，デフリンピックについての報道で興味深い点は，大会へ参加すること自体によって選手の意識に変化が生じてくることである。たとえば，「ハンデを抱えながら頑張る多くの方々に『頑張れば必ず夢はかなう』と伝えたい」といった選手自身の発言からは，人生に対する積極的姿勢の強化を読み取ることができよう（『読売新聞』2017年７月14日）。

また，デフリンピック大会が，日の丸を背負った日本代表としての参加であることから，「耳の聞こえない人の代表ではなく，国民の代表として頑張りたい」という反応を生む場合も存在する（『読売新聞』2017年６月29日）。

さらに，デフリンピック大会への参加者，関係者がほとんどろう当事者であることから，そこでは，自分がろう者であるとの意識が薄れ，通常の社会環境での意識と異なった意識になれたことを指摘する選手もいる（斉藤，2017）。いいかえれば，ここでは，ろう者だけの大会であるが故に，そこでは，「ろう者（障害者）でなくなる」というパラドックスが生じているといえる。

さらに進んで，「ろう者として杜会を変える力をもっている」という意識をもつ者もいる（斉藤，2017年７月31日ｂ）。その一方，デフリンピックは，常に競争相手が同じ聴覚障害者であり，また，大会の運営も同じ障害者が主体となっており，いわば，聴覚障害が一般化，日常化した世界であり，藤原慧選手による「聴覚障害を隠そうとせず，逆に見せにきているようなオープンな姿勢」であるというコメント（荒井，2017年７月13日）が示すような雰囲気が影響しているともいえよう。こうした意識が強まると，障害は，障害というよりも一つの個性であるという認識につながってゆくとも考えられる。

また，なかには，デフリンピックが，異なった国々の選手たちとの交流の機会となるため，言葉によらず，手話などで交流する必要があり，そこではろう者としての「強み」

が見えやすいと感じる者もいる。たとえば，あるデフサッカーの選手は，次のような感想をもらしている。すなわち「聴覚障害者はふだんから手話や身ぶり手ぶりでコミュニケーションをとっている。それが強みとなる。言葉がわからない外国人にも自分たちだからこそ伝えられることがある」という（斉藤，2018）。

6．競技活動上の困難と対処，特別のルール

競技活動や練習において，聴覚障害があるが故にどのような困難に遭遇し，それをどう克服しているか，また競技ルールなどの点で配慮がなされているか，などの点についての報道も少なくない。

こうした点を競技別にまとめると次のとおりである。

陸上競技

- 指導者の指示が聞きとりづらいこと，ライバルの足音や息遣いが聞こえないため，距離感がつかみづらいこと（塩谷，2017）。
- 健常者は足音でリズムをつかむが，聴覚障害者はそれがなく，リズムをつかみ難い（三嶋，2017）。
- リレーでは声や足音をたよりに走者間のバトンタッチを行えないので，あらかじめ走者の歩幅を計測し，その時点を確認して走りだす工夫をする（斉藤，2017年７月31日ａ）。
- なお，スタートの合図は，ランプでしらせるようになっている（斉藤，2017月28日）。

サッカー

- 選手は大きな身振りでパスを要求したり手話を使ってプレーする。また監督は，ボードに文字を書いて指示を出していた（『読売新聞』2018年６月13日西部朝刊）。
- 通常の２，３倍周りを見ないといけない（清水，2022）。
- 審判は笛に加えて旗をふることもある（『読売新聞』2021年２月25日大阪朝刊）（斎藤，2017年７月28日）。
- お互いの目を見て確認しあう（上嶋，2017）。

バレーボール

- 審判は笛などの音声を光や旗などを使って可視化している。また選手はアイコン

タクトや小さなサインを使って意志疎通をはかる（『読売新聞』2022年４月20日東京朝刊）。

・　スパイクやサーブの音で球の威力を予測したり，ボールを誰がとるかを声で確認できないという困難がある（斉藤，2017年７月27日）。

・　初めのうちは聞き取ろうと集中しすぎて頭痛をおこした。（慣れてきてから）相手の動きや振りに目を凝らすことにより，音に頼ってスパイクの強さを判断できない点を補っている（斉藤，2017年７月29日ａ）。

バスケットボール

・　音だけでなく，審判は旗を振って指示をだす（杉浦，2019）。

柔道

・　審判は「待て」と告げるのではなく，選手の肩をたたく（『読売新聞』2022年７月６日）東京朝刊）。

テニス

・　打球音は次のプレーのための重要な情報だが，最初は感覚がつかめず戸惑ったが，その分ボールをよく見るようになった（世界デフテニス選手権大会のメダリスト菰方里菜選手の言葉）（『読売新聞』2021年１月11日中部朝刊）。

自転車競技

・　ギアチェンジやペダルを踏み込む際の音，背後からくる選手の息遣いなど健常者のトップ選手達はかけひきの判断材料にしているが，ろうあ者はこれができない不利がある（トルコ大会のクロスカントリーの銅メダリスト早瀬久美選手の言葉）（木村，2021）。

ボート

・　「こぎ出す」「ストップ」「前を見る」など９つのハンドサインを考えて実行（琵琶湖のレガッタに出場したろうあ学校の教諭の言葉。なおデフリンピックにはボート競技はない）（林，2022）。

ボブスレー（２人あるいは４人乗り）

・　同乗の選手とタイミングを合わせるのに，普通は声でおこなうが，聴覚障害があ

るので，普段から唇やしぐさでカバーしている（チェコのヤブク・ノセク選手の言）（遠田，2022）。

カーリング

・ あらかじめチーム内で決めたハンドサインでスキップが指示を出し，スイーパーがそれをみながら動く（『朝日新聞』2019年12月17日朝刊）。

ハンマー投げ

・ 森本選手は，五輪選手の室伏氏のやり方を学ぶため，室伏選手の映像を作成してもらい，スピーカーに手を触れて振動によってリズム感覚をつかむ練習をした（田原，2012）。

7．社会環境に関する問題提起

デフリンピックあるいはデフスポーツ一般に関連して，社会的ともいえる問題を選手や関係者が提起し，それらが報道されることも稀ではない。

そうした社会的ともいえる問題の一つに健常者との練習や健常者の試合への参加問題がある。身体障害者とやや異なり，聴覚障害者の中には，健常者に交じって試合に出場する選手も稀ではない。たとえば，陸上の中距離ランナー森光佑矢選手は，北信越インターカレッジ大会で健常者に交じって参加し，三種目で優勝している（塩谷, 2017）（因みに，プロのスポーツ選手の中にも聴覚障害者はいる。たとえば，日本ハムの石井裕也投手は，左耳は全く聞こえず，右耳も難聴という）（太田，2017）。

しかし，聴覚障害者が通常のスポーツ大会に出場する場合，競技そのものの遂行には障害がなくとも，大会の運営において，音声による指示や連絡の際に問題が生ずる。たとえば，デフリンピックの棒高跳びの銅メダリスト竹花康太郎選手は，サーフィンの選手権に出場したが，沖合で波待ちする選手に浜辺からマイクで波にのる優先権が通知されるため，パネルで見えるようにするという配慮があっても見えにくい時もあり，同僚の聴覚障害者が失格するケースもあったという（白井，2021）。

したがって，健常者のスポーツ大会にも聴覚障害者が不便なく参加できるよう情報保障を強化することは，今後の社会的課題であろう。

他方，聴覚障害者がこうした「困難」を克服して健聴者と同じ土俵で，練習し試合することは，実は，精神的に障害を克服するという象徴的意味があるともいえる。このことを，藤原慧選手は，次のような言葉で表現している。すなわち「障害を持っていても

やれる，ということを証明するために健聴者の中でやってきた」と（荒井，2017年７月26日）。

その一方，こうした「克服」のシンボルとしての意義を，選手たちがデフリンピック大会出場から常に感じ取るとは限らない。むしろ，同じ聴覚障害者としてのアイデンティティを強め，（障害を克服することもさることながら）障害を素直にうけとめ，それをみずからの特性と考える機会がデフリンピックにあるという見方もある。たとえば，前述の藤原慧は，デフリンピックへの参加の印象を次のように語っている。すなわち「ボクはこれまで聞こえなくとも健聴者と一緒にやれることを証明したくてやってきたが，この世界（ろう者だけの大会）もいいものだなと思った」（荒井，2017年７月26日）。ここには聴覚障害者自身のアイデンティティにまつわる機微な問題が暗示されているともいえよう。

なお，健聴者との練習や健聴者主体の大会への参加は，通常補聴器の使用をともなう場合が多いと考えられるが，そもそも補聴器は，聴覚機能を補助する「道具」であり，その使用の結果として「健聴者にできるだけ近づく」という暗黙の前提がこめられているとすれば，健聴者主体の大会への出場や補聴器の使用が，聴覚障害者のアイデンティティの強化にどう関連するかは，微妙な問題ともいえよう。

また，なかには，デフリンピックとパラリンピックに対する社会的関心や政策の格差を指摘する声もある。たとえば，棒高跳び選手であり，同時にサーファーでもある竹花廉太郎選手はサーフィンをパラリンピック，デフリンピック双方で競技種目とし，「デフリンピックをパラリンピックと対等な舞台にしたい」と語っている（白井，2021）。

さらに，デフリンピックを資金面から社会的に支援する体制が不十分であることを指摘する声も強い。たとえば日本ろう者サッカー協会によれば，（日本代表チームにスポンサーから資金提供はあるものの）選手たちの遠征費や合宿費用はほとんど自己負担であるという（『読売新聞』2018年11月23日東京朝刊，茨城）。デフサッカーの山口彩芽選手の場合，デフリンピック大会への参加にあたり，宿泊費など30万円が選手個人の負担になったこと（『読売新聞』2022年４月29日東京朝刊，石川），ブラジル大会に参加した陸上の佐々木琢磨選手の場合，遠征費のうち50ないし60万円を自己負担したことが報道されている（渡部，2022）。

トルコ大会で金メダルをとった女子バレーチームの尾塚愛実選手は，デフ五輪はパラリンピックより認知度が低く，選手のサポート態勢でも差があるとして，合宿の参加費や遠征費なども心配せずに競技に出られれば良いとの趣旨を語っている（『朝日新聞』2017年11月５日鹿児島全県朝刊）。こうした傾向は，冬季大会種目では一層顕著のようで，イタリア大会の選手団長だった小椋武夫氏は，「渡航費や宿泊費などほとんどの賀

用を選手が自己負担している」と述べている（斉藤，2019）。

こうした実情を反映して，選手の職場での寄付集め（『読売新聞』2017年７月14日西部朝刊），サッカークラブの寄付集め（『読売新聞』2022年４月29日東京朝刊），競技団体によるクラウドファンデイング（志村，2019）などが報道されている。

８．技術開発

デフリンピック大会のいわゆるレガシーとの関連もあり，デフスポーツに関連する技術開発についての記事も稀ではあるが，いくつか見られる。たとえば，光でスタートを知らせる機械の国産化の努力についての記事（斉藤，2017年７月28日），あるいは，東京都が，音声の文字化やアバターによる手話へ変換などの開発を支援することなどを通じ「情報のバリアフリー」化をはかる政策を打ち出したことについての記事（飯田，2022）などが挙げられる。

９．今後の課題

総じて，聴覚障害者に関する一番大きな問題は，コミュニケーションの問題である。それは自明のことであるにもかかわらず，聴覚障害者と対話する時に大切なことは，目を合わせることであるといった，健常者のとるべき態度について報じた記事は意外と少ない（照屋，2018）。

また，デフスポーツの報道は，聴覚障害者の苦難，困難については触れているものの，聴覚障害のある選手や大会関係者と面談した記者が，如何なる方法でコミュニケーションを図ったのか（手話，補聴器，あるいは音声を可視化する機器の使用，または筆談の使用など）ついて，記事のなかで明示しているものはほとんどない。例外的ともいえるものとしては，例えば，朝日新聞石田貴子記者の三枝浩基選手（リレー）へのインタビューで「ノートとパソコンを使った筆談で取材」といった記述がある（石田，2019）。また，おなじく朝日新聞三嶋伸一記者の設楽選手について記事で，「手話通訳を通じて」という記述がある（三嶋，2017）。しかしそうした記述は比較的稀であり，選手からの情報人手およびその深さ，広さについて困難があるのではないかという点自体についての記述はいたって少ないことがみてとれる。この点は，デフリンピックに関する今後の報道において，一つの課題であろう。

さらに，これらの困難を乗り越えて行われているスポーツ活動の魅力は何か，健常者のスポーツとは違う面白さはどこにあるのか，についてのより深い報道はあまりなされ

ておらず，デフリンピックの認知度を高め，かつ深めるためには，観客側の反応と合わせて，この点ついての報道がもっとなされなければならないであろう。いいかえれば，デフリンピックにおける感動とは何かについて，さらに社会的議論がなされなければならないであろう。この点とも関連して，観客の声援や反応を可視化し，そうした「盛り上がり」をろう・難聴者と健聴者が共有するための技術開発が行われつつあるが，それらの技術が社会一般でも活用されてゆく方策についての報道もさらに必要であろう。

また，デフリンピック関係者は，今のところ，知名度向上に専心しており，それは望ましいことと考えながらも，知名度の向上につれてパラリンピックで起こりつつあることを，これからどのように考慮してゆくべきかという，先進的態度を持つにいたっている選手もいることに留意すべきであろう。自転車競技で，数度デフリンピックに参加経験のある早瀬憲太郎選手は，ブラジルでのパラリンピック大会でテレビ報道に携わった際，「パラリンピックが，一部の活躍する障害者選手と一般の障害者の間に溝を作ってしまう」と言う声を聞き，また，自分自身かつて大学時代に，「お前はエリート，夢を持てない人の気持ちを考えろ」と言われたことを想起したという（斉藤，2017年７月20日）。その意味では，デフリンピックの報道が，一般の聴覚障害者にどのように伝搬されているのか，そして，それがどのように受け止められているのか，検証されねばならないであろう。

なお，パラリンピックの知名度向上には，皇室，とりわけ現在の上皇ご夫妻の強い関心と関与があったことを想起すれば，デフリンピックについての皇室の関与と関連報道も重要であろう。

参考引用記事及び文献

荒井秀一（2017年７月13日）「デフリンピック　メダルへ　勝負の年」『読売新聞』東京夕刊.

荒井秀一（2017年７月26日）「聴覚障害　考える機会に」『読売新聞』東京朝刊.

荒井秀一（2022年４月20日）「意思疎通の工夫　見どころ　デフリンピック来月開幕　島本選手団長抱負」『読売新聞』東京朝刊.

荒井秀一，畔川吉永（2022年９月22日）「デフリンピック　強制壁体　25年　東京で夏季大会」『読売新聞』東京朝刊.

飯田真優子（2022年12月22日）「『国際手話』　人材増やせ！　25年　デフリンピック東京大会」『読売新聞』東京夕刊.

石田貴子（2019年１月24日）「フロントライン　この人に聞く」デフリンピック陸上リレーで金　三枝浩基さん／兵庫県」『朝日新聞』兵庫全県朝刊.

市野塊（2018年３月１日）「2017年度対象に競泳藤原さん　スポーツ記者クラブ賞／島根県」『朝日新聞』島根朝刊.

上嶋紀雄（2017年７月８日）「デフリンピック『メダル取る』　サッカー代表の伊丹選手，柏市長訪問／千葉県」『朝日新聞』ちば首都圏１地方朝刊.

上山浩也（2022年９月１日）「石田・川口選手に県が功労賞　聴覚障害者の国際スポーツ大会でメ

ダル／愛知県」『朝日新聞』愛知朝刊 .
内田快（2017年９月７日）「障害者スポーツ，輝く県出身者／島根県」『朝日新聞』島根朝刊.
太田朋男（2017年９月12日）「［フロントライン］ハンデ克服　名選手に」『読売新聞』東京朝刊.
小倉和夫「パラリンピック選手に関する報道の社会的意義と問題点」『パラリンピック研究会紀要第』15,119-130.　https://doi.org/10.32229/parasapo.15.0_119
木村雄二（2021年９月５日）「パラ　聴覚障害選手　裏方で奮闘　自転車競技・早瀬さん」『読売新聞』東京朝刊.
斉藤寛子（2017年７月13日）「（いちからわかる！）デフリンピック　どんな大会？」『朝日新聞』東京朝刊.
斉藤寛子（2017年７月16日）「（デフリンピック）無音の世界，かきわけて　18日開幕」『朝日新聞』東京朝刊.
斉藤寛子（2017年７月20日）「（デフリンピック）開幕　『障害者見る目，変えたい』自転車・早瀬さん夫妻」『朝日新聞』東京朝刊.
斉藤寛子（2017年７月27日）「（デフリンピック）亡き監督へ，熱意継ぐ　女子バレー銀以上」『朝日新聞』東京朝刊.
斉藤寛子（2017年７月28日）「（デフリンピック）目で見てスタート，教師開発　陸上で予備機に」『朝日新聞』東京夕刊.
斉藤寛子（2017年７月29日ａ）「（デフリンピック）高校生躍動，女子バレー金」『朝日新聞』東京朝刊.
斉藤寛子（2017年７月29日ｂ）「（デフリンピック）手話で『君が代』」『朝日新聞』東京夕刊.
斉藤寛子（2017年７月31日ｂ）「（デフリンピック）『社会変える力，持ってる』　日本，メダル27個で閉幕」『朝日新聞』東京夕刊.
斉藤寛子（2017年７月31日ａ）「（デフリンピック）つないだ『心のバトン』　陸上男子リレー金，歩測と影頼り」『朝日新聞』東京朝刊.
斉藤寛子（2018年１月13日）『ろうの子，スポーツ諦めないで　聴覚障害がある大学生ら，体験会を企画』『朝日新聞』東京朝刊.
斉藤寛子（2018年12月15日）「五輪ボランティア，障害あるからこそ　募集の不備きっかけ，視点を生かす試み」『朝日新聞』東京夕刊.
斉藤寛子（2019年11月23日）「デフリンピック『メダル６個目標』　冬季大会壮行会」『朝日新聞』東京朝刊.
佐藤靖（2017年11月28日）「デフリンピック・バドミントン銅，永原選手に道栄誉賞／北海道」『朝日新聞』北海道朝刊.
佐藤靖（2022年９月13日）「スポーツ記者会賞に２個人１団体　長澤愛羅さん・斎藤京香さん・日本航空高バレー部／山梨県」『朝日新聞』山梨全県朝刊.
塩谷耕吾（2017年７月11日）「デフリンピック，２冠狙う　陸上，金沢星稜大・森光選手／石川県」『朝日新聞』石川全県朝刊.
渋谷聖都子（2020年９月１日）「［母なればこそ子と歩む］喜多智子さん（下）　出会いで成長…（連載）＝大阪」『読売新聞』大阪朝刊.
清水暢和（2022年４月20日）「［イブニング・フットボール］デフサッカー　燃える宮田」『読売新聞』東京夕刊.
志村英司（2019年２月15日）「デフアスリート，目指すは五輪　仙台大職員・佐々木さん，来月の世界大会首相／宮城県」『朝日新聞』宮城全県朝刊.
白井亨佳（2021年10月３日）「静寂の海　荒波挑む　デフ棒高跳び銅・竹花さん＝神奈川」『読売新聞』東京朝刊.
城戸康秀（2017年11月５日）「（かごしま　聞きたい）デフ五輪女子バレー金メダル獲得・尾塚愛実

さん／鹿児島県」『朝日新聞』鹿児島全県朝刊.
杉浦奈実（2019年１月11日）「デフバスケ国際大会４位　佐賀県出身の三瀬選手，県庁で報告／佐賀県」『朝日新聞』佐賀全県朝刊.
高津守（2019年９月10日）「デフゴルフ，知って　聴覚障害者らプレー　朝日・棚山で日本選手権開幕／富山県」『朝日新聞』富山全県朝刊.
高村真登（2022年４月26日）「デフゴルフ　世界に挑む　富士河口湖の輿石さん　10月ハワイで大会＝山梨」『読売新聞』東京朝刊.
田中正一（2017年８月８日）「金メダル獲得『うれしい』　デフリンピック・バレー代表の平岡さん，深谷市訪問／埼玉県」『朝日新聞』埼玉朝刊.
田原和宏（2012年７月５日）「ニュース UP: にんげんルポ　ハンマー投げ，もう一人の王者」『毎日新聞』大阪朝刊.
照屋健（2018年４月５日）「障害者と健常者，共にキックオフ　『レプロ東京』社会人リーグに加盟　サッカー」『朝日新聞』東京夕刊.
遠田寛生（2022年２月21日）「輝き続けた，最後まで　北京五輪」『朝日新聞』東京朝刊.
永井啓子（2022年７月８日）「陸上・末吉選手に府スポーツ賞　デフリンピック，棒高跳び銅／京都府」『朝日新聞』京都朝刊.
中島隆（2017年３月15日）「（けいざい＋）ろう者の祈り２；１　僕は走る，仕事でも輝く」『朝日新聞』東京朝刊.
中安真人（2017年12月９日）「第２回パラスポーツ賞　優秀賞　聴覚障害者水泳　藤原慧」『読売新聞』東京朝刊.
野崎智也（2018年５月12日）「デフ五輪優勝・尾塚さん表彰　バレー「連覇めざしたい」ダンス世界大会Ｖのチームも／鹿児島県」『朝日新聞』鹿児島全県朝刊.
林利香（2022年５月19日）「ハンドサインでオール OK　聴覚に障害ある高校生，初のボート大会」『朝日新聞』大阪朝刊.
平塚学（2019年11月17日）「金持選手，４度目の栄誉賞　世界ろう者水泳で金　県スポーツ賞／佐賀県」『朝日新聞』佐賀県朝刊.
平野和彦（2018年１月23日）「日本スポーツ賞　表彰式　もっと速く　強く　グランプリ　陸上　桐生」『読売新聞』東京朝刊.
三嶋伸一（2017年７月14日）「デフリンピック『リレーで金を』　筑波技術大大学院・設楽さん／茨城県」『朝日新聞』茨城１地方朝刊.
横山翼（2017年８月10日）「３選手，特別顕彰など授与「デフリンピック」で好成績／鳥取県」『朝日新聞』鳥取全県朝刊.
渡部耕平（2022年５月５日）「『金メダル持って帰る』　五戸出身・佐々木選手　デフリンピック，陸上に出場／青森県」『朝日新聞』青森全県朝刊.

【Research Note】Content analysis of media coverage of the Deaflympics and future issues

OGOURA Kazuo

Many argue that a main problem for the Deaflympics is low publicity, which indicates that an analysis of the media's response and coverage of the Deaflympics Games and the participating athletes is important.

For this analysis, newspaper reports from the Asahi, Mainichi, and Yomiuri for the period 2017-2022 were examined.

In order to highlight the problems and issues of the Deaflympics and to bring into relief the multi-faceted image of Deaflympics athletes, the analysis was conducted from the following perspectives: the issue of publicity, awards for athletes, causes of disabilities, difficulties in daily life in general, special difficulties in training and competition and how to deal with them, changes in the athletes' awareness through sports activities and participation in the Deaflympics, and the social environment surrounding deaf sports (including competitions with able-bodied athletes).

Finally, based on the above, future issues related to the Deaflympics are summarized.